

ポー・カレン語の文の分類

加 藤 昌 彦

1. 言語の概要

ポー・カレン語 (Pwo Karen) は SVO 型の分析的な (analytic) 言語で、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派カレン語群に属する。チベット・ビルマ系諸言語は一部の例外を除いて一般的に SOV 型言語であるが、カレン語群に属する諸言語は、少なくとも現在知られているものすべてが SVO 型であるという点で特異である。おそらく、カレン祖語の段階において、モン・クメール系言語、中でもモン語派 (Monic) あるいはパラウン語派 (Palaungic) の何らかの言語との接触の結果、基本語順を SOV から SVO に変えたのだと思われる。

ポー・カレン語は、ミャンマーのエヤワディ・デルタ (Ayeyarwaddy Delta)、モン州 (Mon State)、カレン州 (Karen State)、タニンダーイー管区 (Tanintharyi Division)、タイ北西部 (Northwestern Thailand)、タイ中西部 (West-Central Thailand) などに分布する。ビルマ語やスゴー・カレン語とともに、チベット・ビルマ系言語としては最南端に分布すると言える。カレン語群にはポー・カレン語以外に、ブリモー (Blimaw)、ボエー (Bwe)、ゲーバー (Geba)、ゲーコー (Gekho)、カヤー (Kayah)、カヨー (Kayo)、カヤン (Kayan)、マヌ (Manu)、モーネーボワ (Monebwa)、モーボワ (Mopwa)、パクー (Paku)、パオ (Pa-O)、スゴー・カレン (Sgaw Karen)、タレーボワ (Thalebwa)、イエインボー (Yeinbaw)、インタレー (Yintale) などを含む様々な言語がある。これらカレン語群の言語のうち、ポー・カレン語に系統的に最も近い言語の一つはスゴー・カレン語である。Jones (1961) はポー・カレン語とスゴー・カレン語をカレン語群の中の遠い位置に置いたが、両言語の語彙一致率の高さと形態統語法の共通点の多さから見てそのような捉え方は妥当でない。より妥当なもの Shintani (2003) の分類である。Shintani は、カレン語群 (Shintani 自身の用語では 'Brakaloungic') の中に Sgaw-Pwo Branch をたて、その中にポー・カレン語とスゴー・カレン語を入れている。同様に Manson (2003) も、ポー・カレン語とスゴー・カレン語を比較的近い位置に置く。ミャンマーに住むカレン人は、狭義のカレン人としてポー・カレンとスゴー・カレンのみを挙げることがある。この民族的分類はポー・カレンとスゴー・カレンの言語の近しさを多分に反映していると筆者は考えている。

ミャンマー国内におけるカレン人全体の人口は、1993 年ミャンマー政府推計で 286 万人である。このうち半分ほどはポー・カレン人だと思われる。また、Lewis (1984: 70) によれば、1983 年中期のタイ国内におけるスゴー・カレンとポー・カレンを合計した人口は 24.6 万人であり、このうち約 20% がポー・カレンだという。

次にポー・カレン語の方言区分について述べておく。Kato (1995) は、ミャンマー側のポー・カレン語方言群を、相互理解が可能か否かを基準として、Western

Pwo Karen と Eastern Pwo Karen の 2 つに分類した。Phillips (2000) はこれにタイ側で話される Northern Pwo Karen を加えた。さらに Kato (2009b) は、新しく発見した方言 Htoklibang Pwo Karen について報告し、相互理解の可能性に基づいて表 1 に示す方言分類を行った。なお、Kato (2009b) では暫定的に未確認の方言 Phrae Pwo Karen を入れておいたが、ここでは省くことにする。その後、筆者の方言分類についての考えは変わっていない。

表 1 ポー・カレン語の方言区分

方言	分布地域
Western Pwo Karen	エヤワディ・デルタ (ミャンマー)
Htoklibang Pwo Karen	モン州ビーリン (Bilin) 郡 (ミャンマー)
Eastern Pwo Karen	カレン州 (ミャンマー), モン州 (ミャンマー), タニンダーイー管区 (ミャンマー), タイ中西部
Northern Pwo Karen	タイ北西部

参考のため、これまで筆者が調査を行ったことのあるポー・カレン語方言の話される地点を図 1 に示す。すべてミャンマー側の地点である。

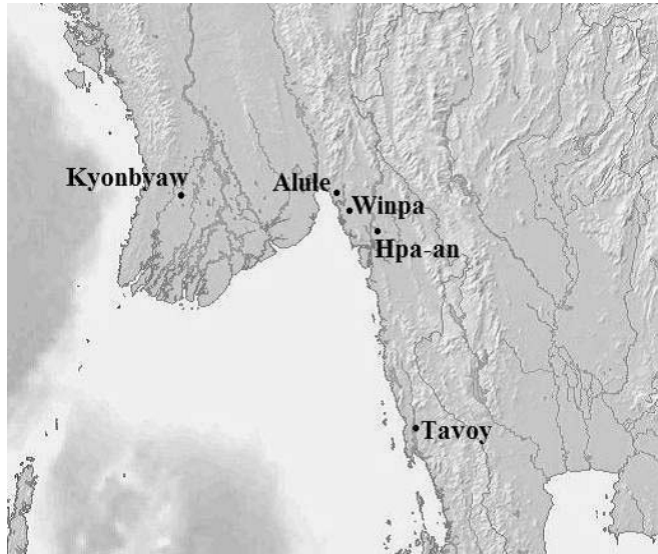


図 1 ポー・カレン語諸方言が話される地点 (筆者が調査済みの地点のみ)

このうち、エヤワディ管区の小都市チョウンビョー (Kyonbyaw) で話される方言は Western Pwo Karen に属する。また、モン州ビーリン (Bilin) 郡アルーレー (Alule) 村で話される方言は Htoklibang Pwo Karen に属する。そして、モン州ビーリン (Bilin) 郡ウィンパ (Winpa) 村で話される方言、カレン州の州都パアン (Hpa-an) で

話される方言，ならびに，タニンダーイー管区の行政上の中心都市タボイ (Tavoy または Dawe) で話される方言は，Eastern Pwo Karen に属する。なお，筆者は Northern Pwo Karen に属する方言の調査を行ったことはない。

本稿で扱う方言は，カレン州パアン (Hpa-an) 周辺で話される方言で，Eastern Pwo Karen に属する。これをパアン方言 (Hpa-an dialect) と呼ぶ。パアンの北東約 30km に位置するフラインボエ (Hlaingbwe) の方言や，パアンの東南東約 70km に位置するコーカレイ (Kawkareik) の方言は，パアン方言によく似ているため，同じ方言に含めて考えることができる。

表 2 にパアン方言の声調と Haudricourt が一連の論文 (Haudricourt 1946, 1953, 1975) で示したカレン祖語の声調がいかに対応するかを示しておく。比較言語学的に重要だからである。

表 2 パアン方言の声調

	1	2	2'	3
H	â[51]	á[55]	á[55]	à[11]
M	à[11]	á[55]	á[55]	à[11]
L	à[11]	ā[33]		á[55]

横列の 1, 2, 2', 3 は祖語の声調で，1 と 2 は Haudricourt (1946) が最初に設定した舒声調 (plain tone) を示し，2' は Haudricourt (1975) が追加設定したもう 1 つの舒声調を示す。3 は促声調 (checked tone) である。縦列の H, M, L は祖語の音節における頭子音の種類で，それぞれ以下のタイプの子音が含まれる。H=無声有気閉鎖音，無声摩擦音，無声共鳴音；M=無声無気閉鎖音，入破音（あるいは前声門化閉鎖音）；L=有声閉鎖音，有声摩擦音，有声共鳴音。パアン方言の音素については本稿末の音素目録を参照されたい。

2. 本稿で論じること

本稿では，ポー・カレン語の文をもし分類するとしたら，どのような分類が可能かを考えていく。ポー・カレン語は分析的言語で屈折がなく，また，隣接する同系言語のビルマ語に見られるような，動詞述語に義務的に現れてパラダイムをなす機能的形態素のようなものも存在しないため，動詞の活用や動詞に付属する機能的形態素の分布をもとにパラダイム的に文を分類するということが不可能である。ポー・カレン語の文を分類する場合，その最良の方法は，野田 (1996) が日本語を対象に行っているような分類法だと思われる。

野田 (1996: 23) は日本語の文を次のように大きく 6 種類に分類している¹。

<1> 述語の有無からみた分類—喚体の句・述体の句

¹ 野田 (1996) において，ここに掲げた <1> から <6> は実際には記号 (ウ) ~ (ク) で示されている。

<2> 述語の文法カテゴリーからみた分類

- (a) 述語幹からみた分類—名詞文・形容詞文・動詞文
- (b) ボイスからみた分類—能動文・受動文
- (c) 肯定否定からみた分類—肯定文・否定文
- (d) モダリティからみた分類—質問文・命令文

<3> 主題からみた分類—有題文・無題文

<4> 省略からみた分類—省略文やウナギ文

<5> 従属節からみた分類—単文・複文・重文

<6> 文章・談話からみた分類—地の文・会話文

野田 (1996: 22) は、ある一つの観点から文を分類する分類法を「カードボックス型の分類」と呼び、一方、「必要に応じていろいろな観点からの分類ができるように、一つ一つの文にたいして、いろいろな観点についてのデータが書きこまれているもの」(野田 *ibid.*) を「データベース型の分類」と呼んでいる。データベース型の分類法を取ると、一つの文が必要に応じて様々な種類の文として分析され得ることが利点であるという。パラダイム的な文の分類が不可能なポー・カレン語においては、文を分類するならデータベース型の分類法が最適である。

本稿では、野田 (1996) を参考にし、ポー・カレン語の文を、(1) 述語の種類、(2) 肯定・否定、(3) 発話行為、(4) 法、(5) 態、(6) 従属節、という6つの観点から分類することを試みる。本稿の議論では、それぞれの観点で分類できるかどうかということに主眼があり、それらの分類がポー・カレン語文法においてどのような意義を持つかまでは踏み込まない。それは今後の研究の課題となる。分類するにあたって最も重視したのは、分類に際して目に見える形式的な基準を設定することができるかどうかという点である。意味的あるいは語用論的な基準にしか頼ることのできない分類は極力排除した。形態統語論的基準に裏打ちされた意味的・語用論的基準であれば採用してよいと考えるが、意味的・語用論的基準のみを用いることはしない。形式的基準が示せない分類は客観性に欠けると筆者は考えるからである。

考察を始めるにあたって、ポー・カレン語の節の構成と品詞分類について述べておく。

ポー・カレン語の基本語順は、他のカレン系言語同様、SVO である。節を構成する要素はあらまし次のようになっている(動詞連続を含む節を除く)。括弧は任意の要素を示す。動詞と動詞助詞からなる部分を動詞複合体(verb complex)と呼ぶ。副詞的要素には、副詞・数量表現・側置詞句などが含まれる。主語より後の部分を述部(predicate)と呼び、述部に現れた動詞を述語(predicate word)と呼ぶ。

(1) (主語)–(動詞助詞)–動詞–(動詞助詞)–(第一目的語)–(第二目的語)–(副詞的要素)

次に、品詞分類について述べておく。加藤 (2004) はポー・カレン語の品詞に、名詞(noun)、動詞(verb)、副詞(adverb)、助詞(particle)、感嘆詞(interjection)の5つを設定した。うち感嘆詞は他の語と統語的な関係を持たない特殊な品詞である。これを除いた残り4つの品詞を区別するためのテストとして、(i) 単独で文を形成

することができる, (ii) 動詞助詞 (verb particle) の生起を可能にする, (iii) 動詞の項になることができる, の3つが重要である。これらのテストに合致するかどうかを **yes/no** で示すと次のとおりである。

表3 品詞分類のテスト

	(i)	(ii)	(iii)
名詞	yes	no	yes
動詞	yes	yes	yes
副詞	yes	no	no
助詞	no	no	no

上記テストはこの言語の品詞の「定義」そのものではない。あくまでも、各品詞を区別するための有効なテストであるをご理解いただきたい。

上に示した品詞のうち、助詞はさらに、側置助詞、従属節助詞、一般助詞、名詞修飾助詞、動詞助詞、副助詞、文助詞の7つに分類することができる。うち、側置助詞と従属節助詞の2つは、文中に動詞・主語名詞・目的語名詞以外の要素を導入する働きを持つ。側置助詞は、一般的には側置詞と言われるものに相当し、節内に名詞句を導入する。一方の従属節助詞は文中に従属節を導入する。残りの5つの助詞は、様々な要素を修飾する働きを持つ。一般助詞は側置助詞句や従属節など様々な要素を、名詞修飾助詞は名詞句を、動詞助詞は動詞を、副助詞は動詞句を、文助詞は文を、それぞれ修飾する。

3. 述語の種類から見た分類

ここでは述語の種類から見た文の分類について論じる。

3.1. 動詞文と無動詞文

筆者は、(1)に示したとおり、また3.2.で論じるように、ポー・カレン語の節は基本的に述部に動詞を含むと考えている。したがって、ポー・カレン語の文は基本的に**動詞文**である。しかし例外がある。(2)に示した例のように動詞を含まない文である。この文は名詞のみから成り立っている。

(2) *chəchən*

雨

雨だ!

例文(2)は、目の前で雨が降り出したという出来事を話者がその現場で言い表したものである。同じ状況で同じ出来事をポー・カレン語話者がもし動詞文を用いて言語化するなら、最も一般的な例は(3)に示すものであろう。

(3) *chə ɣê chən jəu*

物 来る 雨が降る PRF

雨が降ってきた。

この文の中に名詞 *chəchən* 「雨」は含まれない。動詞文で雨が降ってきたことを言い表すには、雨が降ることを表す動詞 *chən* を用いる必要がある、それを名詞化接頭辞 *chə-* で名詞化した名詞 *chəchən* 「雨」は現れないのである。したがって (2) は、(3) のような動詞文から何かが省略されて作られたものと見なすことができない。本稿では (2) のように動詞のない文を**無動詞文**と呼ぶ。

例文 (2) のように動詞を伴わずに発話される名詞句は、感嘆や注意喚起などを表す。この例に即すならば、感嘆の例としては、突然の降雨への驚きを表す場合や、雨に対する憂鬱な感情を表す場合が挙げられる。また、注意喚起の例としては、雨が降ってきたことを他人に知らせるためこの文を発する場合が挙げられる。重要なことは、無動詞文が出来事を淡々と伝えることができず、感嘆や注意喚起というニュアンスを必然的に伴ってしまうという事実である。動詞文の場合は文が感嘆や注意喚起のニュアンスを伴う場合があったとしてもそれは必然的ではない。このことから、無動詞文では名詞句がいわば感嘆詞的に使われているのだと言える²。

無動詞文の形式的な特徴は、文を主語と述部に分けることができないということである。主語と述部を兼ね備えた文は必ず動詞を述部に含む。したがって、「述語の種類から見た文の分類」という見方に立つとき、動詞文はこの見方の射程内におさまるが、無動詞文はそもそも主語も述語も持たないと考えられるから、述語の種類というよりはむしろ述語の有無から見た分類ということになる。

ところで、動詞のない文をすべて無動詞文と捉えるべきかということ、そうではない。次の (a) の問いに対して、(b) のように *klòunciθá* だけで答えることができる。

(4) (a) *nə ʔán chənó lē*

2sg 食べる 何 か

お前は何を食べたか？

(b) *klòunciθá*

パパイヤ

パパイヤ。

しかし、この (4b) を無動詞文とは考えない。その理由の1つは、(4b) が感嘆や注意喚起を伴わない文だということである。もう1つの理由は、これを (5) のような動詞文に「復元」することができるということである。

² ボー・カレン語の無動詞文は、山田孝雄 (1908) が「喚体の句」と名付けた日本語の文と同様の機能を持つと考えることができる (山田 1908: 1218–1238 を参照)。

(5) *jə ʔán klòncíθá*

1SG 食べる パパイヤ

俺はパパイヤを食べた。

結局のところ、(4)に示したやりとりにおいて、聞き手の求める情報を少ない労力でしかも短時間で伝えるために名詞句のみからなる (b) の文が使われているのだと考えられる。その点で、名詞句のみを用いた話し手の意図が (2) とは根本的に異なる。したがって、(4b)は無動詞文ではない。本稿では、(4b)を、(5)のような動詞文から語用論的に不必要な情報を含む要素を省略したもの、つまり、不完全な動詞文であると考ええる。

3.2. 名詞文はあるか

加藤 (2004) はポー・カレン語に次のような文があるとし、これらを名詞文と呼んだ (p.51)。しかし、その後の調査でこれらが容認度の低い文であることが分かった。

(6) *ʔəjò khòθá*

これ マンゴー

(これはマンゴーだ)

(7) *ʔəwê phlòun*

3SG カレン人

(彼はカレン人だ)

ポー・カレン語で「これはマンゴーだ」や「彼はカレン人だ」はコピュラ動詞 *mwē* を使って次のように言うのが普通である (3.4. 参照)。

(8) *ʔəjò mwē khòθá*

これ COP マンゴー

これはマンゴーだ。

(9) *ʔəwê mwē phlòun*

3SG COP カレン人

彼はカレン人だ。

(6)は次のような場面であれば使うことができるという。例えば、目の前に色々な種類の果物が並んでいて、指差しながら、「これはマンゴー、これはバナナ、こ

それは「パイヤ…」のように対比しつつ言うような場面である。(7)も同様に、様々な民族が一堂に会して、「この人はカレン人、この人はビルマ人…」のように、指差しながら対比しつつ言うような場面である。ここで、指差し行為が伴わなければ使えないという事実は重要である。この事実から本稿では、(6)において、ʔəjò「これ」も khòθá「マンゴー」も、聞き手の注意を喚起するための間投詞のようなものとして使われていると考える。(7)も同様である。ʔəwê「彼」も phlòuN「カレン人」も、注意喚起のために使われていると考える。そこで本稿では、(6)(7)のような発話は、感嘆詞付きで“ʔəjò! khòθá!” “ʔəwê! phlòuN!”と書いたほうが相応しいような、無動詞文の連続であると見なしたい。(6)と(7)はそれぞれ2つずつの無動詞文を含むということである。したがって、本稿の解釈によればポー・カレン語に名詞文はないということになる。

3.3. 側置詞句を述部とする文はあるか

東南アジアの諸言語には述部が側置詞句のみからなる文がよく見られる。たとえば、ポー・カレン語に隣接する同じチベット・ビルマ系のビルマ語では、*tù gâ yàngòuN gâ* (彼/は/ヤンゴン/から)「彼はヤンゴン出身だ」のような文が可能である。このような文はポー・カレン語で可能だろうか。次に挙げる例文で考えてみたい。*ló*は位置、起点、着点を表す側置助詞である(加藤 2010 参照)。(10)(11)(12)はそれぞれ、*ló*が位置、起点、着点を表す例である。

(10) ʔəwê ʔó ló ləkòuN ʔò
3SG いる LOC ヤンゴン あの
彼はヤンゴンに住んでいる。

(11) ʔəwê yê ló ləkòuN ʔò
3SG 来る LOC ヤンゴン あの
彼はヤンゴンから来た。

(12) ʔəwê lì ló ləkòuN ʔò
3SG 行く LOC ヤンゴン あの
彼はヤンゴンへ行った。

例文(10)(11)(12)から動詞を取り除くと、すべて(13)のようになる。これは非文と言ってよいほどに容認度が非常に低い。

(13) ʔəwê ló ləkòuN ʔò
3SG LOC ヤンゴン あの

同じことは他の側置詞についても言える。(14) から動詞を取り除いた (15) と、(16) からやはり動詞を取り除いた (17) は、どちらも容認度が非常に低い。

- (14) *həmənī nɔʔ dē ʔə cúʔ ʔə khán*
 人類 TOP ある COM 3SG 手 3SG 脚
 人類には手と脚がある。

- (15) *ʔhəmənī nɔʔ dē ʔə cúʔ ʔə khán*
 人類 TOP COM 3SG 手 3SG 脚

- (16) *ʔəwê ʔɔʔ bê pəjàn θò*
 3SG いる ようだ ビルマ ようだ
 彼はビルマ人のようにしている。

- (17) *ʔəwê bê pəjàn θò*
 3SG ようだ ビルマ ようだ

このように、述部が側置詞句のみからなる場合、その文は適格な文とは言いがたい。したがって、ポー・カレン語には側置詞句を述部とする文はないと言ってよいと思われる。

3.4. コピュラ文

3.2. でポー・カレン語に名詞文はないとした。物事の属性や物事同士の同定を表すには、コピュラ動詞 *mwē* (または *mē* と発音される) を用いた (18) のような文を使う必要がある。

- (18) *ʔəjò mwē khòthá* (= (8))
 これ COP マンゴー
 これはマンゴーだ。

mwē は動詞である。なぜなら、動詞助詞 (verb particle) の生起を可能にするからである。次の (19) では *mwē* の前に非現実を表す動詞助詞 *mə* が現れており、(20) では *mwē* の後に強調を表す動詞助詞 *wê* が現れている。これら動詞助詞は *mwē* によって出現が可能になっている。

- (19) *ʔəjò mə mwē nwēthá*
 これ IRR COP ジャックフルーツ
 これはジャックフルーツだろう。

- (20) *pə təwān nɔ̄ ʔə məin mwē wē bɔ̄ŋkətái lɔ̄*
 1PL 村 TOP 3SG 名 COP EMPH (村名) (断定)
 私の村は、名前がボンカタイだ。(I-10.3)

主語と1個の目的語を取ることができる動詞を二項動詞と呼ぶことにすると、*mwē*は主語と1個の目的語を取ることができるので、二項動詞である。他の二項動詞と比べると、コピュラ動詞は否定したとき特殊な振舞いをする。*mwē*を主要部とする文には次の3種類の否定方法がある。

- (21) *ʔəjò mwē khòthá ʔé*
 これ COP マンゴー NEG
 これはマンゴーではない。

- (22) *ʔəjò mwē khòthá mwē ʔé*
 これ COP マンゴー COP NEG
 これはマンゴーではない。

- (23) *ʔəjò khòthá mwē ʔé*
 これ マンゴー COP NEG
 これはマンゴーではない。

すなわち、*mwē*の否定方法には、主語と目的語をそれぞれAとBで表すと、(21)のような“A動詞B ʔé”，(22)のような“A動詞B動詞 ʔé”，(23)のような“A B動詞 ʔé”の3種類があるのである。一方、通常二項動詞には、(22)(23)に相当する否定方法はない。動詞 *ʔán*「食べる」を例にとって示す。(24)を否定したものは(25)である。すなわち、“A動詞B ʔé”という形である。“A動詞B動詞 ʔé”と“A B動詞 ʔé”にそれぞれ対応する(26)と(27)は非文である。

- (24) *thàʔwà ʔán khòthá*
 ターワー 食べる マンゴー
 ターワーはマンゴーを食べる。

- (25) *thàʔwà ʔán khòthá ʔé*
 ターワー 食べる マンゴー NEG
 ターワーはマンゴーを食べない。

(26) *θàʔwà ʔán khòθá ʔán ʔé
 ターワー 食べる マンゴー 食べる NEG

(27) *θàʔwà khòθá ʔán ʔé
 ターワー マンゴー 食べる NEG

この事実は、他の二項動詞とコピュラ動詞を別扱いする根拠になる。したがって本稿では、*mwē*を「コピュラ動詞」と呼んで他の二項動詞とは別個に扱う。また、同じ理由により、*mwē*を主要部とする文をコピュラ文と呼び、他の文とは別扱いすることができる。

なお、コピュラ文には項として補文が現れることがある。(28)と(29)は、それぞれ、主語と目的語に補文が現れた例である。ポー・カレン語の補文は標示なしでそのまま主節に埋め込まれる。

(28) [chəθíchəbá ʔó cə] nó mwē chəyì bá
 知識 ある 少ない TOP COP 善 か
 知識が少ないということは良いことか。(IV-03.49)

(29) phlòunmú ʔəyān ʔə dú tháú θənà nó mwē wê [nēʔán
 女性 ため (名詞化) 大きい 最も 敵 TOP COP EMPH 信じる
 jô chə] ló
 しやすい 物 (断定)

女性にとって最大の敵は、信じやすいということである。(V-05.95)

主語に補文が現れた文において、補文の情報を補う語句が *mwē*の目的語として現れると、その文は談話レベルにおいて分裂文のような効果を持つ。次の(30)がその例である。

(30) [mà θi phôʔwà] jò mwē jò ló
 (使役) 死ぬ (人名) TOP COP 1SG (断定)
 ポーワーを殺したのは私なのだ。(V-01.96)

また、*mwē*の目的語として補文が現れた文は、しばしば次の(31)(32)(33)のように何らかの情報に対する説明的な意味合いを伴ったり、(34)のように強い疑問を表すことがある。これらは日本語の「のだ文」で訳せる場合が多い。そしてこのような場合には、(32)や(33)のように主語を同定することが困難な場合がままあ

る³。主語を同定することが困難な場合を果たしてコピュラ文と呼んでよいのか疑問が生じる。これは今後の課題としたい。

- (31) *khìNθitá mwē [ʔə ʔé ʔə] mwē ʔé*
 (人名) COP 3SG 愛する 3SG COP NEG
 キンティーターは、彼を愛しているのではない。

- (32) *mwē [hə lə dá thàin bá] dàlô dùr*
 COP 1PL NEG 会う 再度 NEG (断定) よ
 たまたま会わなかつただけなんだよ。(001.3726)

- (33) *làn thàin ʔə phú θè khô | [mə khlàin ló phí phlòvN]*
 下がる 今度 3SG 子供 PL 側 IRR 話す 教える (裨益) カレン
mwē làn ʔé ló
 COP もはや NEG (断定)
 子供の代になると、(その子供に親たちが) カレン語を話して教えてやらないのだ。(IV-06.10)

- (34) *mwē [mə khléin tháv khòkhô] lē*
 COP IRR 冷たい 最も どれ か
 (これらの飲み物は) 一体どれが一番冷たいのだろうか? (003.758)

さらに、コピュラ文と見なしてよいかどうかの問題が生じるケースとしては、(35)や(36)のような相槌的な表現が挙げられる。(35)に示した *mwē* のみからなる文は話し相手の尋ねたことを単純に肯定する場合によく使われ、(36)に示した“*mwē* + 疑問を表す助詞”からなる文は、話し相手の教えてくれた新しい情報に対する納得の気持ちを表す場合によく使われる。

- (35) *mwē*
 COP
 そうです。

- (36) *mwē ʔâ (~jā)*
 COP か
 そうですか (納得)。

³ (33)は“A B *mwē ʔé*”型否定表現のB部分に補文が現れた例である。補文が主語として現れているのではない。その証拠として、*mwē*を補文の前に置くことも可能であることが挙げられる。

(35)と(36)は、それぞれ、「あなたの言ったことが私の考えていることです」および「今あなたの言ったことが真実なのですか」というような意味を表すポー・カレン語のコピュラ文から名詞句を取り出したものとも考えられなくはない。しかし、そのようなことを表すコピュラ文が(35)と(36)の代わりに実際に使われることはほとんど考えられないから、(35)と(36)を通常のコピュラ文と同様に考えてよいものかどうか疑問が残る。これについても今後の課題としたい。なお、(36)に示した“mwē + 疑問を表す助詞”は次の(37)に示すとおり、確認を表す付加疑問表現として使われることがよくある。

- (37) *kèyòkhó mə thàiv ló, mwē jā*
 明日 IRR 帰る (断定) COP か
 明日、帰るんですね？ (IV-04.296)

4. 肯定・否定から見た分類

4.1. 肯定文と否定文

否定形式を持つ文を**否定文**と定義することが可能である。逆に、否定形式を持たない文を**肯定文**と定義することが可能である。否定形式には、*ʔé, lə... bá, ləxi*の3つがある。*ʔé*は主節の否定形式、*lə... bá*は従属節の否定形式である。*ləxi*は禁止を表す助詞である。

まず主節の否定形式は、(38)に示すように、文末に現れる助詞*ʔé*である。

- (38) *θàʔwà ʔán khòthá ʔé (=25)*
 (人名) 食べる マンゴー NEG
 ターワーはマンゴーを食べない。

助詞*ʔé*を伴った文の特徴には次の二つがある。一つめは、非現実法 (*irrealis*) を表す動詞助詞 *mə* が決して現れないということである。助詞*ʔé*を伴った文においては、(39)に示すとおり、発話時点より後の事象を表す文であっても *mə* が現れない (*mə*については**6.1**参照)。(40)は *mə* が *ʔé* と共起しているので非文である。

- (39) *kèkhó ʔəwê lì ʔé*
 明日 3SG 行く NEG
 明日彼は行かない。

- (40) **kèkhó ʔəwê mə lì ʔé*
 明日 3SG IRR 行く NEG
 (明日彼は行かない)

もう一つは、完了 (*perfect*) を表し、日本語では「既に、もはや」と訳せる助詞 *jàu* と *lən* が、肯定・否定を条件として相補分布を示すことである。次の (41) と (42) はそれぞれ肯定文と否定文である。(41) に示すとおり肯定文では *jàu* が使われ、(42) に示すとおり否定文では *lən* が使われる。各例の斜線の右に示した文はこの原則に反しているので非文である。

(41) *ʔəwê yê jàu* / **ʔəwê yê lən*
 3SG 来る PRF 3SG 来る PRF

彼は既に来ている。

(42) *ʔəwê yê lən ʔé* / **ʔəwê yê jàu ʔé*
 3SG 来る PRF NEG 3SG 来る PRF NEG

彼はもはや来ない。

次に、従属節の否定形式は *lə...bá* である。*lə* は動詞の直前、*bá* は節末に現れる。上に挙げた助詞 *ʔé* を伴う文の二つの特徴は、*lə...bá* で否定された従属節にも見られる。すなわち、(43) に非現実の *mə* は現れないし、(44) で *jàu* を使うことはできない。

(43) *kèkhó ʔəwê (*mə) lə yê bá ʔəkhúcòn, ...*
 明日 3SG IRR NEG 来る NEG ~だから

明日彼は来ないから...

(44) *ʔəwê lə yê { lən / *jàu } bá ʔəkhúcòn, ...*
 3SG NEG 来る PRF PRF NEG ~だから

彼はもはや来ないから...

(43) と (44) で、否定形式の現れた節は従属節なので否定「文」ではないが、否定形式 *lə...bá* は (45) のように主節に現れることがある。これは従属節ではないから否定「文」である。否定形式 *lə...bá* が主節に現れると、その文は何らかの情報に対する説明的な意味合いを伴う。日本語には「~のだ」で訳せる場合が多い。

(45) *ʔəwê lə yê bá*
 3SG NEG 来る NEG

明日彼は来ないんですよ。

さらに、禁止を表す助辞 *ləxi* (*xì, khi* ととも発音される) も *ʔé* や *lə...bá* と同様の振舞いを見せる。(46) に例を示す。

(46) *ɣé ləxi*

来る な

来るな。

助詞 *ləxi* は、既に見た 2 つの否定形式と同様に、*ləN* とのみ共起する。*yàv* と共起することはない。(47) に示すとおりである。

(47) *ɣé ləN ləxi* / **ɣé yàv ləxi*

来る PRF な

来る PRF な

もう来るな。

この事実から本稿では、*ləxi* も否定形式と見なし、*ləxi* が現れた文も否定文と見なす。*ləxi* は *mə* と共起しないという点でも *ʔé* および *lə... bá* と共通するが、命令を表す文には一般に *mə* が現れないので、これは分類の根拠にはならない。なお、西部方言 (Western Pwo Karen) の禁止を表す助詞 *ləyé* およびスゴー・カレン語の同源形式 *təyé* との比較から、ポー・カレン祖語の否定形式として、**ləye*² を再建することができる。**lə* は否定を表す拘束形態素 (*lə... bá* の *lə* と同源) で、**ye*² は「良い」の意の動詞である。すなわち、「良くない」という意味の音列だったと考えられる。ポー・カレン祖語については、Kato (2009b) を参照されたい。

ところで、否定形式を持たない文が語用論的に否定の意味を呈する場合があることには注意すべきである。(48a) に対する返答として用いられる通常の否定文は (b1) だが、(b2) を用いることもできる。(b2) は、「食べるものか」と日本語で訳せるような強い否定を表す。この文は形の上では疑問文であるが、語用論的には否定文と同様の意味を表す。本稿ではこのようなものを否定文とは見なさず、あくまでも疑問文であるとする。(49) も同様である。

(48) (a) *nə ʔán bā*

2SG 食べる か

お前は食べたか?

(b1) *ʔán ʔé*

食べる NEG

食べなかった。

(b2) *ʔán bá bā*

食べる 正しい か

食べるものか。

(49) *hə bá θàthán lóthà bá bá nê*
 1PL (当為) 怒る 互いに 正しい か ね

いがみ合っていて良いものかね。(001.687)

なお、疑問語疑問文で使われる文助詞 *lê* (5.1. 参照) は、疑問語がない文で使われると強い疑念を表す。このような場合も文が否定文と同様の意味を表すことがある。次の (50) や (51) に示すとおりである。本稿では、これらについても否定文ではなく疑問文であると見なす。

(50) *nə bá kəlôn chə phōphōjò lē*
 2sg (当為) 急ぐ 物 このように か

お前は (本当に) こんなに急がなければならないのか? (いや急ぐ必要はない)。(001.1582)

(51) *phlòun bá θíjā jè nān yà lē*
 人 (当為) 知る 1sg いずれかの ~人 か

誰か他人が私のことを知っているはずがあるだろうか? (いや知らない)。(V-03.31)

5. 発話行為から見た分類

本稿では発話行為のみに基準を置いた分類は行わない。したがってここでは、発話行為そのものではなく発話行為に関連する形式をあくまでも重視し、形式に基づいた分類が可能かどうかを考える。発話行為のみに基づくと客観性を欠いてしまう危険があるからである。

5.1. 疑問文と平叙文

ポー・カレン語の疑問文には、真偽疑問文の文末に置かれる文助詞 *bâ* (*bá* または *jā* と発音されることもある)、あるいは疑問語疑問文の文末に置かれる文助詞 *lê* (*lé*) が現れる。これらの現れた文を疑問文と定義することが可能である。一方、これらの現れない文を平叙文と呼ぶことができる。(52) から (54) に示すのは真偽疑問文である。

(52) *θíkhúxwíjəun ?ó dài bâ*
 頭痛薬 ある まだ か

頭痛薬はまだありますか? (I-sen.37)

(53) *nə lì khòlà khān nɔ́ máu chī ʋâ*
 2SG 行く インド 国 TOP 快適な (婉曲) か
 インドに行って楽しかったか? (009.10)

(54) *nə dá jè ʔé ʋâ*
 2SG 見える 1SG NEG か
 お前には俺が見えないのか? (III-03.8)

次に疑問語疑問文の例として (55) から (58) を掲げる。疑問語疑問文の文末には *lê* が現れる⁴。

(55) *nə ʔán chənɔ́ lē*
 2SG 食べる 何 か
 あなたは何を食べましたか?

(56) *nə nī já xwè béin lē*
 2SG 得る 魚 いくつ ~枚 か
 何匹の魚を捕まえた? (I-06.68)

(57) *nə yê thàin ló cəpân khān chəcái lē*
 2SG 来る 帰る LOC 日本 国 いつ か
 あなたはいつ日本から帰って来たんですか? (V-04.133)

(58) *jɔ́ bēthí lē, θwíwò*
 容易な どのように か (人名)
 どう簡単だというのだ、トゥイーウォー? (IV-04.154)

なお、(55) に否定辞 *ʔé* を入れて否定文にした (59) は非文である。ポー・カレン語の疑問語は同一節中で否定形式と共起できないのである。(59) の代わりに (60) を用いなければならない。

⁴ *lê* は口語ビルマ語の *lé* と同源であろう。対応するスゴー・カレン語形式は *lê* である。これらの形式は Matisoff (2003) の **lay* に遡る。これに関して林/Hayashi (2007, 2009) は、**lay* とあわせて **ny-* を再建する必要性を論じている。ポー・カレン語と同じカレン語群のゲーバー語では、疑問語によって使われる文助詞が異なる。疑問語疑問文で使われる文助詞のうち、*dɔ́* 「どこ」と共に使われる *lè* と *dā* 「何」と共に使われる *nè* はそれぞれ **lay* と **ny-* に遡ることができると考えられる (加藤 2008 参照)。一言語に疑問語疑問文で使われる文助詞が複数存在することは、祖語においても複数の文助詞が存在した可能性を視野に入れるべきことを示唆する。

(59) **nə ʔán chənó ʔé lē*
 2SG 食べる 何 NEG か

(あなたは何を食べませんでしたか?)

(60) *nə lə ʔán bá nó mwē chənó lē*
 2SG NEG 食べる NEG TOP COP 何 か

あなたが食べなかったのは何ですか?

疑問を表す文助詞が現れた文が常に疑問を表すとは限らない。次の文は相手の主張に納得した時の相槌として使われるし、4.1. で見た (48) の (b2) や (49)(50)(51) は否定を表している。しかし、*bâ* や *lē* の現れた文を疑問文と定義するのだから、これらも疑問文と見なすべきである。

(61) *mwē bâ*
 COP か

そうですか。

次に、イントネーションで表される疑問について考えてみよう。ポー・カレン語では、一般的に、イントネーションが疑問を表すことはないが、驚きを伴った疑問のみ、イントネーションで表されることがある。次の例を見ていただきたい。(62) の (a) の発言に対して、(b) では、文末で [523] という凹型のイントネーションを用いることにより驚きを伴った疑問を表している。このような文は疑問文と考えるべきなのだろうか。

(62) (a) *ʔəkhâjò jə mə ʔán khəráiθwá xō*
 今 1SG IRR 食べる コオロギ よ

私はこれからコオロギを食べますよ。

(b) *nə mə ʔán [523]*
 2SG IRR 食べる

えっ、食べるの?

ここで指摘しなければならないことは、[523] というイントネーションがたとえば、[ŋ̃] のような音声とさえ自由に共起することができるということである。[ŋ̃] という音声は、ポー・カレン語の音韻体系に当てはまらず、ポー・カレン語の言語形式と認めることさえ困難な音声である。しかし [ŋ̃] に [523] がかぶさった [ŋ̃ 523] という音声は存在する。そしてこの [ŋ̃ 523] という音声は、[523] というイントネーションそのものによって、驚きを伴った疑問を表すことができる。それゆ

えポー・カレン語の母語話者は、[ŋ̃ 523] という音声を聞けば、その音声を発した人が驚きを伴った疑問を呈していることが分かるのである。本稿では、形式的基準に則った分類を重視するから、言語形式と認めることが困難な音声と同時に発音される音声現象（ここではイントネーション）を分類基準に用いるのは妥当でないと考える。少なくとも、ポー・カレン語における [523] というイントネーションは、形態統語論が論じるべき現象の外にあると考えるべきである。したがって、本稿では (62b) のような文を疑問文であるとは考えない。

5.2. 命令文は存在するか — あわせて禁止文について

加藤 (2004) は命令文という範疇を設定し、その認定基準として、否定したときに、禁止を表す助詞 *ləxi* を用いるものであると規定した (*ləxi* は *xì*, *khì* とも発音される)。助詞 *ləxi* は 4.1. で既に述べたとおり、否定形式の一種である。(63) を例に取ると、これを否定すれば (64) のようになるので、(63) は命令文だということになる。

(63) (nə) ʔán
2sg 食べる
(お前が) 食べろ。

(64) (nə) ʔán *ləxi*
2sg 食べる な
(お前は) 食べるな。

しかしながら、否定したときに *ləxi* が用いられるという認定基準には問題がある。上の (64) の代わりに、(65) を使って禁止を表すことが可能だからである。(66) のような実例もある。(66) では、「泣くな」という意の文に否定形式として ʔé が使われている。

(65) ʔán ʔé
食べる NEG
食べない。 ; 食べるな。

(66) yán ʔé, phókhwâ. ké thán həkhwâ jò, hə yán wê ʔé
泣く NEG 息子 なる (完成) 男 なら 1PL 泣く EMPH NEG
泣くな、息子よ。男なら泣くな。(V-03.110)

このように、否定の助詞 ʔé を用いた文が禁止を表すことがあるので、「命令文とは、否定のとき *ləxi* を使うもの」という命令文の定義は成り立たなくなる。

また、そもそも (63) の “*nə ʔán*” は、命令を表す文としてでなく、「お前は食べた」「お前は（習慣として）食べる」「お前は食べることになっている」などの意味を表す文としても使うことができるので、この文を否定する場合に助詞 *ləxi* を使うかどうかは、談話レベルで初めて決定されることである。本稿の分類では形式的基準を重視するので、談話レベルの基準は使わない。したがって本稿では、加藤 (2004) で示した考え方とは異なり、命令文という文の種類を認定することは放棄する。このように考えると、命令という観点から見た場合、(63) は単に「談話レベルで命令を表す文」だということになる。

一方で、(64) のような助詞 *ləxi* を用いた文は、*ləxi* という明示的な形式を伴い、かつ常に禁止を表すので、**禁止文**と呼ぶことが可能だろう。禁止文における動詞は、(64) の *ʔán* 「食べる」のように、意志による制御が可能な事象を表すものでなければならない。また、禁止文には次に示すように、人称制限がある。二人称以外の主語を受け付けないのである。

(67) { *nə* / **jə* / **ʔəwê* } *li* *ləxi*
 2SG 1SG 3SG 行く な
 {あなたは/*私は/*彼は} 行くな。

これは、(63) の主語を一人称代名詞に替えても、「私は食べた」「私は（習慣的に）食べる」「私は食べることになっている」「私は（これからすぐに）食べる」などの意味を表す適格な文として成り立つことと対照的である。(63) の主語を三人称代名詞に替えても同様である。この事実も、禁止文を認める理由の一つである。

なお、ここで勸奨（～しよう）についても述べておくことにする。ポー・カレン語において勸奨は、(68) のように、通常の文を用いて表現する。したがって、勸奨を表す特別な形式は存在しない。勸奨であることを明示するために、主語として一人称複数の代名詞が現れることもある。しかし、主語が現れたとしても (68) は、「私達はマンゴーを食べた」「私達は（習慣として）マンゴーを食べる」などの情報を表す文と同一である。

(68) (*pə*) *ʔán khòthá*
 1PL 食べる マンゴー
 マンゴーを食べよう。

この文を否定する場合には、(69) のように、通常の文と同様に否定辞 *ʔé* を文末に置くだけである。この文も、「私達はマンゴーを食べなかった」「私はマンゴーを食べない」などの情報を表す通常の否定文と変わらない。

(69) (*pə*) *ʔán khòthá ʔé*
 1PL 食べる マンゴー NEG
 マンゴーを食べないことにしよう。

したがって、(68)や(69)などのポー・カレン語の勸奨を表す文は、単に「談話レベルで勸奨を表す文」ということになる。

5.3. 祈願文

ポー・カレン語には、祈願を表す動詞助詞 *lā* を用いた文がある。(70)のような文である。(祈願を表す文には文助詞 *chài* がしばしば現れる。)

(70) *chə̀râ ʔóchón lā chài*
 教師 元気な (祈願) (文助詞)

先生が元気でありますように。

祈願を表す動詞助詞 *lā* を用いた文は、*lā* という明示的な形式を持ち、常に祈願という発話行為を表すので、**祈願文**と名付けることができる。祈願文には、部分的に人称制限がある。(71)に示すように、意志による制御が可能な事象を動詞が表す場合、二人称の主語しか現れることができない。(主語はもちろん現れなくてもよい。)

(71) { *nə / *jə / *ʔəwê* } *lì lā*
 2sg 1sg 3sg 行く (祈願)

{あなたが / *私が / *彼が} 行ってくださいますように。

この(71)の「行く」の例に見るように、意志による制御が可能な事象を動詞が表す場合、祈願文は命令に近い意味を持つ。しかし丁寧さの度合いが高い。例えば *lì lā* 「行ってくださいますように」は、単純に *lì* 「行け」と言うよりも丁寧である。

一方、意志による制御が不可能な事象を動詞が表す場合、祈願文ではすべての人称の主語が現れることができる。(72)では、「機会の獲得」を表す動詞助詞 *bá* が現れることによって、動詞(正確には動詞複合体)が意志による制御のできない事象を表すようになっている。そのため、すべての人称の主語が出現可能である⁵。

(72) { *jə / nə / ʔəwê* } *lì bá lā*
 1sg 2sg 3sg 行く (機会) (祈願)

{私が / あなたが / 彼が} 行けますように。

⁵ 祈願文における人称制限は、澤田(1995)がビルマ語において「願望文」と名付けた一群の文のうちのある種の文の人称制限に幾分似ている。ビルマ語の願望文(いわゆる命令文を含む)のうち *=pàzè* を用いた文は、制御可能な事象の場合、三人称主語の出現しか許さないのに対し、制御不可能な事象の場合、すべての人称の主語が現れ得る。制御可能性を条件とする人称制限の存在という点で、ポー・カレン語の祈願文はビルマ語の *=pàzè* を用いた文に似るが、両者の決定的な違いは、ポー・カレン語の祈願文は、制御可能な事象の場合、二人称主語のみが可能なことである(ビルマ語の *=pàzè* は三人称主語のみ許す)。

祈願文の否定には、(73)に示すとおり、4.1. と 5.2. で見た禁止を表す助詞 *ləxi* が使われる。ここで *ʔé* は使われない。すなわちこの文は祈願文であるのと同時に禁止文でもある。

(73) { *nə* / **jə* / **ʔəwê* } *li* *lā* *ləxi*
 2SG 1SG 3SG 行く (祈願) な

{あなたは / *私は / *彼は} 行かないでくださいますように。

注意すべきは、意志による制御が不可能な事象の場合、祈願文の否定文は、禁止文であるにもかかわらず、すべての人称の主語が可能だということである。5.2. で述べたように、禁止文には二人称主語しか現れない。しかし、禁止文であっても、その文が *lā* の現れた文すなわち祈願文でもあって、かつ、意志による制御が不可能な事象を動詞または動詞複合体が表すとき、すべての人称の主語が現れ得るのである。(74)に示すとおりである。

(74) { *jə* / *nə* / *ʔəwê* } *li* *bá* *lā* *ləxi*
 1SG 2SG 3SG 行く (機会) (祈願) な

{私が / あなたが / 彼が} 行けませんように。

ただし、このことから、主語の選択制限という点において、祈願文は禁止文の特性を打ち消す力を持っていると考えるのは早計である。なぜなら、禁止文の動詞(または動詞複合体)は意志による制御が可能だからである。祈願文において人称制限がなくなるのは意志による制御が不可能な場合だから、条件が異なるのであり、祈願文が禁止文の特性を打ち消したと単純に考えることはできない。

意味的には、(74)は禁止というよりも、事象が生起しないようにとの話者の願望を表している。これについては、*ləxi* の表す禁止の意味を、祈願を表す *lā* が弱めた結果であると解釈する。

6. 法から見た分類

6.1. 現実文・非現実文といった文の設定は可能か

動詞助詞 *mə* は非現実法 (irrealis modality) を表すと捉えることができる。具体的な用法を示すと、この助詞は、まず (75) のように、事象が発話時点より後に生起することを表す。また、(76) のように、発話時点 (あるいは過去) の状態に対する推量を表す。

(75) *kèkhó* *jə* *mə* *ʔán*
 明日 1SG IRR 食べる

私は明日食べる。

- (76) ʔəkhâjò ʔəwê mə ʔɔ́ ló thəʔàn ʔò
 今 3SG IRR いる LOC (地名) あの
 今彼はパアンにいるだろう。

ポー・カレン語と最も接触の機会の多いチベット・ビルマ系言語であるビルマ語では、法を表す助詞が動詞の後に義務的に現れる。ポー・カレン語でも、述語の法範疇として *mə* の現れない“ \emptyset + 動詞”と“*mə* + 動詞”の対立を設定し、 \emptyset に現実法を標示する職能を認め、肯定文では法 (modality) が義務的に標示されると見ることが可能だろうか (4.1. で論じたとおり、否定文に *mə* は現れない)。つまり、(77) のような文では \emptyset によって法が標示されているのかということである。

- (77) mūyá jə ʔán
 昨日 1SG 食べる
 私は昨日食べた。

結論を先に言えば、それは難しい。5.2. で見たように、次の文は「お前が食べた」「お前が (習慣的に) 食べる」「お前が食べろ」などの意味を表す。

- (78) nə ʔán (= (63))
 2SG 食べる
 お前が食べた; お前が (習慣的に) 食べる; お前が食べろ。

この文の動詞の前に \emptyset を認めれば、「お前が食べろ」のような命令も、現実法が表すことになる。また、次のような一人称複数主語の文が勸奨を表し得ることを考えれば、 \emptyset は勸奨をも表すことになる。

- (79) pə ʔán
 1PL 食べる
 私達が食べた; 私達が (習慣的に) 食べる; 食べよう。

現実法を表す形式が命令や勸奨を表すと考えるのは難しい。

このように、*mə* を伴わない文は、(77) のような現実事象の描写に加えて、命令や勸奨をも表す。言い換えれば、*mə* を伴わない文は、法において一貫した特徴を持っていないのである。一貫した法の特徴を持たない一群の文にゼロの法形式を認めて一括りにすることには無理があるだろう。このことから、本稿では、 \emptyset に現実法を表す機能があると見なして述語に法が義務的に標示されると見ることが妥当でないと結論づける。しかし一方で、*mə* が非現実という統一的な法を表していることに疑いはないと思われる。したがって、*mə* が現れた文を非現実文と定義することは可能であろう。4.1. で述べたとおり、*mə* は否定文には現れないので、非現実文が同時に否定文であるということはある得ない。

7. 態から見た分類

ポー・カレン語に受動態と呼べるような現象は存在しない。しかし、態 (voice) という現象が存在しないわけではない。態の観点からポー・カレン語を見たとき、設定可能な文の種類は使役文と中動文 (逆使役文) である。

7.1. 使役文 I と使役文 II

加藤 (2004) は使役を表す文としてタイプ I とタイプ II を認めた。タイプ I は、(80) のように文の主語と動詞複合体 (verb complex) の第二要素の論理的主語が異なる文であると定義した。この文では、文全体の主語は *jə* 「私」であるが、動詞複合体 [*vc dà li*] の第二要素である *li* の論理的主語は「彼」であり、文全体の主語と異なっている。このような特徴を持つ文はみな使役的事象を表す。*dà* は使役を表す動詞助詞で、被使役者 (causee) に対して使役者 (causer) のコントロールが直接的に及ばない場合に用いられる。

(80) *jə* [*vc dà li*] *ʔəwê*
 1SG (使役) 行く 3SG
 私は彼に行かせた。

下に他の例を挙げる。(81) の *mà* はやはり使役を表す動詞助詞で、被使役者に対して使役者のコントロールが直接的に及ぶ場合に用いられる。一方、(82) では、述語の第一要素として「殴る」という具体的な動作を表す動詞が用いられている。この文の *dó θi* 「殴り殺す」の部分は動詞連続である。この場合も *mà* と同様に、被使役者に対して使役者のコントロールが直接的に及ぶ状況を表す。

(81) *jə* [*vc mà θi*] *ʔəwê*
 1SG (使役) 死ぬ 3SG
 私は彼を殺した。

(82) *jə* [*vc dó θi*] *ʔəwê*
 1SG 殴る 死ぬ 3SG
 私は彼を殴り殺した。

このような文を本稿では**使役文 I**と呼ぶことにする。

加藤 (2004) でタイプ II と呼んだ文は、(83) のように補文を取るものである。補文を取る動詞はたくさんあるが、補文の中の動詞に非現実法を表す *mə* が決して現れないものがタイプ II であると定義できる。(83) が表す状況において、「行く」という行為が発話時点より後に生じるものであったとしても、*mə* が現れると非文

になる。(84)に示すとおりである。補文に *mə* が現れないという特徴を持つ文は必ず使役的事象を表す。

(83) *jə ʔənməN [ʔəwê li]*
 1SG 命ずる 3SG 行く
 私は彼に行くことを命じた。

(84) **jə ʔənməN [ʔəwê mə li]*
 1SG 命ずる 3SG IRR 行く

このような文を本稿では**使役文 II**と呼ぶことにする。

使役文 I と使役文 II は、使役的事象を表すという点では共通しているが、今のところ、この2種の文にのみ排他的に見られる形態統語論的な共通点は見つかっていない。したがって本稿では、この2つを同じ種類の文とは見なさない。

7.2. 中動文

Kato (2009a) は、ポー・カレン語に他動詞述語から自動詞述語を派生する次のような操作があることを指摘し、これを中動態 (*middle voice*) とも呼ぶことができると述べた。逆使役態 (*anticausative voice*) と呼んでもよいだろう。まず、(85)を見ていただきたい。このような他動詞述語に再帰を表す動詞助詞 *θà* を後置すると、(86)に示すとおり、元の目的語が主語位置に立つ文が得られるのである。元の主語はこの文に現れることができない。また、意味的に (86) は動作主の存在を前提としないので、自発的事象を表すことができる。

(85) *ʔəwê pàv thán pàitəran*
 3SG 開ける (完成) 窓
 彼は窓を開けた。

(86) *pàitəran pàv thán θà*
 窓 開ける (完成) (再帰)
 窓が開いた。

この操作は、自動詞的事象を表す動詞が存在しない場合に、そのすき間を埋める役割を果たす (Kato 2009a を参照されたい)。ポー・カレン語において、他動詞述語の目的語を自動詞述語の主語に換える操作はこれのみである。(86) のような文を**中動文**あるいは**逆使役文**と呼ぶことが可能だろう。下に他の例を示す。

(87) ʔəwê ʔánlê θà jàv

3SG 変える (再帰) PRF

彼は変わってしまった。

(88) khà θàv θà jàv

寝台 動かす (再帰) PRF

寝台 (の位置が) 動いてしまった。

8. 従属節から見た分類

ポー・カレン語の従属節には、副詞節、関係節、補文がある。従属節を含む文を複文と呼ぶことができる。一方、単一の節からなる文は単文である。次に掲げる(89)(90)(91)は複文の例である。(89)の縦線の前の部分は副詞節、(90)の括弧でくくった部分は関係節、(91)の括弧でくくった部分は補文である。副詞節の多くは、後述するように、従属節助詞によって導入される。関係節は、加藤(2001)で論じたように、標示なしで名詞の前あるいは後に置かれる場合と、関係節を導く助詞 *lɔ* を介して名詞の後に置かれる場合とがある。(90)は標示なしで名詞の後に置かれた関係節である。補文は、埋め込みを示す標示なしにそのままの形で主節に埋め込まれる。

(89) nəθí ʔè mí báθà | thàiv mí

2PL (条件) 寝る ~たい 帰る 寝る

お前達は寝なければ帰って寝なさい。

(90) phlòvN [lì bá pəjàN khāN] ʔó lə yà

人 行く (経験) ビルマ 国 存在する 一 ~人

ビルマに行ったことのある人が一人いる。

(91) jə nèʔáN [ʔəwê mə yê]

1SG 信じる 3SG IRR 来る

私は彼が来ることを信じている。

ポー・カレン語において複文を認定しようとするとき、問題が生じるのは副詞節である。ある種の副詞節においては、それが従属節なのかそれとも独立の文なのか判断が難しいことがあるからである。以下ではこの問題について論じたい。

その前に、副詞節の例をいくつか見ておく。上に挙げた(89)では、従属節助詞 *ʔè* によって副詞節が導かれている。このように、副詞節は従属節助詞によって導

かれるのが普通である。(92)(93)(94)ではそれぞれ、*ʔəkhúçòn*, *ɣòn*, *lānān*によって副詞節が導かれている。

- (92) *lòn chəpámáú cwá wê ʔəkhúçòn | láí lánthé khwái wê lə*
 追う 快樂 大変 EMPH (理由) 学業 落ちる (徹底) EMPH 一
néin nó lō
 ~年 のだ (断定)

快樂にばかり耽っていたので、落第してしまった。(V-01.59)

- (93) *pàv thán pàitəlân ɣòn | chəphúxā náu lán wê ləpòvN*
 開ける (完成) 窓 (継起) 虫 入る (内側) EMPH たくさん
mā lō
 非常に (断定)

窓を開けると、虫がたくさん入ってきた。(001.1020)

- (94) *jə ʔò θài lānān | jə mən mwē ʔé*
 1sg 飲む 酒 (逆接) 1sg 酔っている cop NEG
 俺は酒を飲んだが、酔ってはいない。(V-03.109)

しかし、ポー・カレン語には、従属節助詞を伴わない副詞節が存在する。そのような副詞節が現れたとき、「副詞節と主節」を「文の連続」と区別することが難しくなる。

8.1. 従属節助詞を伴わない副詞節

次に示すような音連続は一見、二つの文からなるように見える。

- (95) *ʔəθí bóN nī chəbáinchəbón | cáinyà wê lō jābò*
 3PL 包む 得る 荷物 逃げる EMPH (断定) よ
 彼らは荷物をまとめて、逃げ出したのだった。(021.89)

しかし、この音連続の前半部分を次のように否定形式 *lə... bá* で否定できるのを見れば、この前半部分は副詞節だと考えざるを得ない。**4.1.** で述べたように、*lə... bá* は従属節に現れる否定形式だからである。

- (96) *ʔəθí lə bóN nī chəbáinchəbón bá | cáinyà wê lō jābò*
 3PL NEG 包む 得る 荷物 NEG 逃げる EMPH (断定) よ
 彼らは荷物をまとめずに、逃げ出したのだった。

したがって、ポー・カレン語には従属節助詞を伴わない副詞節が存在すると思われることになる。いわゆる *parataxis* である。

ところが一方で、この音連続の前半部分を否定辞 *?é* で否定することもできないわけではない。その場合、この音連続は二つの文からなると考えなければならない。*?é* は主節で使われる形式だからである。

(97) *?əθí bón nī chəbáínchəbón ?é. cáinyà wê ló jābò*
 3PL 包む 得る 荷物 NEG 逃げる EMPH (断定) よ

彼らは荷物をまとめなかった。(しかし) 逃げ出したのだった。

この事実をどのようにどのように解釈すべきか。おそらく、ポー・カレン語では、(98)のように図示できるような、従属節が主節を修飾する構造すなわち複文と、(99)のように図示できるような二つの文の連続との間にはっきりとした境界線がなく、連続的につながっているのではないか。

(98) [SUBORDINATE CLAUSE] [MAIN CLAUSE]

(99) [SENTENCE] [SENTENCE]

こう考えることによって、(95)の前半部分を否定する方法に二つの方法があることが最も自然に説明できると思われる。

ところで、従属節助詞を伴わない副詞節の主節に対する意味的關係には様々なものがあり得る。(100)を例に取って考える。

(100) *?əwê ?ánchâ khló | xwè yûchá*
 3SG 売る ござ 買う 米

この文は実に様々な意味に解釈することができる。例えば、「彼はござを売って、米を買った」[単なる継起]、「彼はござは売ったが、米は買った」[逆接]、「彼はござを売ったので、(その金で)米を買った」[理由]、「彼はござを売ると、(習慣的に)米を買う」[条件]などなどである。すなわち、「ござを売る」という事象と「米を買う」という事象の意味的關係は、この文ではまったく限定されないのである。

以下に、従属節助詞を伴わない副詞節を含む複文だと考えられる事例を挙げておく。

(101) *jə θà cáicáv | lì báθà ?é*
 1SG 心 乱れた 行く ~たい NEG

いやになったから行きたくない。(003.155)

- (102) *nə mə chəmà | nə θà làncháí vâ*
 2SG する 仕事 2SG 心 満足な か
 あなたは仕事をしていて満足か？ (004.241)
- (103) *jə jò thî ləyájò | thəljāN khā lə béin ló*
 1SG 運ぶ 水 今夕 天秤棒 折れる 一 ~本 (断定)
 私が今日の夕方水を運んでいたとき、天秤棒が折れてしまった。(I-sen.98)
- (104) *pòmèinmú yé | lōN yūchá páichân*
 尼僧 来る 喜捨する 米 お金
 (私は) 尼僧が来ると、米やお金を喜捨する。(024.69)
- (105) *ləthàin chə dè xīphàn | mī mēin ló xīphàn yéin ?ò*
 語る 物 COM (人名) 寝る そのまま Loc (人名) 家 あの
 (彼は) ファイパウンと語らったあと、そのままファイパウンの家に泊まった。
 (IV-04.307)
- (106) *thəu thán nī phəbàin | càv làn pjà wê jə méjâ nó ló*
 出す (出現) 得る 毛布 引く (下方) (提示) EMPH 1SG 前 のだ (断定)
 (彼は) 毛布を取り出し、私の前に引っぱって来て見せてくれたのだ。
 (V-02.82)

次のように、従属節助詞を伴わない副詞節が複数個現れることもある。

- (107) *chə khléin chā | mī kəmtūnà | jə dōunkòun chā mā*
 物 寒い 非常に 寝る 夜 1SG ちぢこまる 大いに 非常に
 ló
 (断定)
 大変寒いので、夜寝るとき、私はちぢこまっている。(003.657)

8.2. 従属節助詞を伴わない副詞節と動詞連続

ポー・カレン語には、多くの東南アジア諸言語と同様、動詞連続がある。動詞連続とは、動詞間の関係を表す標示なしに動詞が並ぶ現象である。ポー・カレン語の動詞連続には、加藤(1998)に示したとおり、動詞間に名詞句などの他の要素が介在できない「連結型 (concatenated type)」と、動詞間に名詞句などの他の要素が

介在できる「分離型 (separated type)」の2種類がある⁶。8.1. で論じた従属節助詞を伴わない副詞節は、動詞間の関係を明示する標識が現れず、さらに、従属節の動詞と主節の動詞の間に様々な要素が現れ得るので、分離型動詞連続と似ている。似ているからには異同を論じる必要がある。ここでは、分離型動詞連続が、従属節助詞を伴わない副詞節とは明らかに異なることを示したいと思う。(108) が分離型動詞連続の一例である。分離型動詞連続には、2番目の動詞がこの例のように結果を表す場合と、可能を表す場合とがある。

- (108) ʔəwê ʔán mì blè
 3SG 食べる ご飯 腹一杯の
 彼はご飯を食べて腹一杯になった。

分離型動詞連続と従属節助詞を伴わない副詞節は、次の4点において異なる。

第一に、従属節助詞を伴わない副詞節の場合は、通常、節と節の間にポーズが置かれてもかまわない。このことを節と節の間に # を置いて表す。

- (109) ʔəθí bón nī chəbáinchəbón # cáinyà wê ló jābò (=95)
 3PL 包む 得る 荷物 逃げる EMPH (断定) よ
 彼らは荷物をまとめて、逃げ出したのだった。(021.89)

一方、分離型動詞連続の場合には一気に発音される。したがって、次のように最初の動詞句と次の動詞句の間にポーズを入れると不自然である。

- (110) ʔəwê ʔán mì # blè
 3SG 食べる ご飯 腹一杯の

第二に、従属節助詞を伴わない副詞節の場合は、副詞節の動詞と主節の動詞の両方に主語名詞句を置くことができる。

- (111) ʔəθí_i bón nī chəbáinchəbón | ʔəθí_i cáinyà wê ló jābò
 3PL 包む 得る 荷物 3PL 逃げる EMPH (断定) よ

一方、分離型動詞連続の場合にはそれができない。

⁶ Aikhenvald and Dixon (2006) の用語では、連結型は contiguous serial verb construction, 分離型は non-contiguous serial verb construction に相当する。

- (112) *ʔəwê_i ʔán mì ʔəwê_i blè
 3SG 食べる ご飯 3SG 腹一杯の

第三に、従属節助詞を伴わない副詞節の場合は、最初の動詞のみを否定形式 *lə... bá* で否定することができる。

- (113) ʔəθí lə bón nī chəbáinchəbón bá | cáinyà wê ló jábò
 3PL NEG 包む 得る 荷物 NEG 逃げる EMPH (断定) よ
 彼らは荷物をまとめずに、逃げ出した。

分離型動詞連続の場合はこれができない。

- (114) *ʔəwê lə ʔán mì bá blè
 3SG NEG 食べる ご飯 NEG 腹一杯の

第四に、従属節助詞を伴わない副詞節の場合は、時間を表す語句や場所を表す語句などの周辺的な名詞句を、二つの動詞が別個に取ることができる。

- (115) ʔəθí bón nī chəbáinchəbón mūyá | cáinyà wê lənìjò ló
 3PL 包む 得る 荷物 昨日 逃げる EMPH 今日 (断定)
 jábò
 よ

彼らは昨日荷物をまとめて、今日逃げ出したのだった。

分離型動詞連続の場合にはそれぞれの動詞が別個の周辺的な名詞句を取ることではできない。

- (116) *jə ʔán mì mōkhó blè ʔəkhâjò
 1SG 食べる ご飯 さっき 腹一杯の 今

上記の4点のうち、従属節助詞を伴わない副詞節の特徴は、「最初の動詞の否定」に異なる否定形式を用いることを除き、すべて文の連続にも当てはまる。表にまとめると次のとおりである。

表 4: 文連続、複文 (副詞節)、分離型動詞連続の比較

	ポーズを置くこと	両方に主語の使用	最初の動詞の否定	別個の周辺名詞句
文の連続	可	可	ʔé	可
従属節助詞なしの複文	可	可	<i>lə... bá</i>	可
分離型動詞連続	不可	不可	不可	不可

このように比べてみると、文の連続と従属節助詞を伴わない副詞節を含む複文は、互いに似ていることが分かる。一方、分離型動詞連続は他の2つとは異なっていることが分かる。このことから、本稿では、分離型動詞連続は複文と見なすべきではなく、あくまでも1個の節の中に複数個の動詞が出現している現象だと考える。

9. まとめ

本稿では、様々な観点でポー・カレン語の文を見たとき、どのような文の分類が可能かを考えた。ポー・カレン語は、パラダイムの的に文を分類することのできない言語である。そのため、野田 (1996) の言う「データベース型の分類」という見方で分類を試みた。その際、重視したのは形式的基準である。考察の結果、次のような文の種類が設定可能であることが分かった。

- 述語の種類（述語の有無）から見た分類
 - 動詞文, 無動詞文
 - コピュラ文
- 肯定・否定から見た分類
 - 肯定文, 否定文
- 発話行為から見た分類
 - 疑問文, 平叙文
 - 禁止文
 - 祈願文
- 法から見た分類
 - 非現実文
- 態から見た分類
 - 使役文 I, 使役文 II
 - 中動文 (逆使役文)
- 従属節から見た分類
 - 単文, 複文

データベース型の分類では、同じ文が様々な観点から分類される。例えば、(117) は、動詞文であると同時に、コピュラ文でもあり、否定文でもあり、疑問文でもあり、単文でもある。

(117) *nə mwē phlòuN ?é vâ*

2SG COP カレン人 NEG か

お前はカレン人ではないのか。

データベース型分類の利点の一つは、様々な分類基準を可能なかぎり追加することができるということである。したがって、本稿で論じた分類とは異なる観点による文の分類を今後さらに追加できることは言うまでもない。

今回は、各々の観点による形式的な分類が可能かどうかということのみに主眼を置いたため、これらの分類がポー・カレン語文法においてどのような意義を持つか、あるいは持たないのかについては論じることができなかった。これは今後行うべき作業として残されている。

略号と記号

COM	随伴者・携帯物・道具等を表す助詞	1SG	一人称単数代名詞
COP	コピュラ動詞	2SG	二人称単数代名詞
EMPH	強調を表す助詞	3SG	三人称単数代名詞
IRR	irrealis modality を表す助詞	1PL	一人称複数代名詞
LOC	位置、起点、着点を表す助詞	2PL	二人称複数代名詞
NEG	否定を表す助詞	3PL	三人称複数代名詞
PL	複数を表す助詞		節境界
PRF	完了を表す助詞	[_{vc}]	動詞複合体
TOP	主題を表す助詞		

データ出典

例文に付した IV-04.102 などの数字は筆者の資料における整理番号である。ピリオドの前が資料番号、ピリオドの後の数字が文番号を表す。資料のリストは加藤 (2004: 549–552) に挙げてあるので参照されたい。整理番号を付していない例文は作例である。

ポー・カレン語パアン方言の音素目録

子音						母音				声調
p	θ[t]	t	c	k	ʔ	i	i	u	má	[55]
ph		th	ch	kh		ɪ		ʊ	mā	[33]
b[β]		d[dʰ]				e	ə	o	mà	[11]
			ɕ	x	h	ɛ	a	ɔ	mâ	[51]
				ɣ	ʙ				(mə	軽声)
m		n	ɲ	ŋ	N					
w			j							
		l	r							

韻母の目録

i	i	u	ai	aʊ	(ɪN)	əN	eɪN	əʊN	oʊN
ɪ		ʊ			aN	oN		aɪN	
e	ə	o							
ɛ	a	ɔ							

参 考 文 献

- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon (eds.) 2006. *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press.
- 林範彦 (Hayashi, Norihiko). 2007. 「チノ語の疑問文末に現れる3つの助詞について」. 『言語研究』131:45-76.
- Hayashi, Norihiko. 2009. "The historical development of Youle Jino". Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*. Senri Ethnological Studies 75: 255-280.
- Haudricourt, André-G. 1946. "Restitution du karen commun". *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 42.1: 103-11.
- _____. 1953. "A propos de la restitution du karen commun". *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 49.1: 129-32.
- _____. 1975. "Le système des tons du karen commun". *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 70.1: 339-43.
- Jones, Robert B. 1961. *Karen Linguistic Studies*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 加藤昌彦 (Kato, Atsuhiko). 1998. 「ポー・カレン語 (東部方言) の動詞連続における主動詞について」. 『言語研究』113: 31-61.
- _____. 2001. 「ポー・カレン語 (東部方言) の関係節」. 『東京大学言語学論集』20: 275-300.
- _____. 2004. 「ポー・カレン語文法」. 東京大学博士論文.
- _____. 2008. 「ゲーバー語基礎資料」『アジア・アフリカの言語と言語学』3, pp.169-219.
- _____. 2010. 「ポー・カレン語の「格」」. 澤田英夫 (編) 『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp.311-330.
- Kato, Atsuhiko. 1995. "The phonological systems of three Pwo Karen dialects". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 18.1: 63-103.
- _____. 2008. "A first report on 'Htoklibang' Pwo Karen and reconstruction of the Proto-Pwo phonemic system". Paper presented at the 41st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, September 2008, SOAS, University of London.
- _____. 2009a. "Valence-changing particles in Pwo Karen". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 32.2: 71-102.
- _____. 2009b. "A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms". *Asian and African Languages and Linguistics* 4: 169-218.
- Lewis, Paul and Elaine 1984. *Peoples of the Golden Triangle*. London and New York: Thames and Hudson.
- Manson, Ken. 2003. *Karenic language relationships: A Lexical and Phonological Analysis*. Chiang Mai: Department of Linguistics, Payap University.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- 野田尚史 (Noda, Hisashi). 1996. 「文の種類」. 『日本語学』15: 22-31.
- Phillips, Audra. 2000. "West-Central Thailand Pwo Karen phonology". *33rd ICSTLL Papers*. Bangkok: Ramkhamhaeng University. pp.99-110.
- 澤田英夫 (Sawada, Hideo). 1995. 「現代ビルマ語の願望文の文末要素 - sei_ の機能について」. 日本言語学会第110回大会発表, 於早稲田大学.
- Shintani, Tadahiko L. A. 2003. "Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution". Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Phonetics of Tone, and Descriptive Studies*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. pp.37-54.
- 山田孝雄 (Yamada, Yoshio). 1908. 『日本文法論』東京: 寶文館.